

平成 18 年度 大自然塾「鳩ノ巣フィールド」活動報告

鳩ノ巣連絡協議会

[はじめに]

大自然塾「鳩ノ巣フィールド」森林再生活動はこの3月をもって、4年半を経過した。平成18年度もNPO法人森づくりフォーラムの管轄のもと、関連団体2グループによる「鳩ノ巣連絡協議会」によって毎月1回の定例イベントの運営・管理を軸に展開してきた。活動内容は提出済みの「平成18年度活動計画」をベースに実施されたが、以下はその報告である。

[鳩ノ巣連絡協議会について - 活動の前提 -]

関連団体: 樹恩ネットワーク・森林インストラクター東京会の2団体による共同運営

運営方法: 月1回の定例会における協議決定により運営

活動内容: 月1回の「大自然塾」イベントの運営を柱とし、長期ビジョンのもとでの活動計画の実行

活動方針: 長期ビジョンを始めとする活動方針を以下とする。 * 2003.5.12 作成

長期ビジョン

委託された現在の鳩ノ巣・棚沢地区の森を「豊かな美しい森 = 多様性のある森」として創出し、奥多摩町の活性化に寄与することで、東京都「大自然塾」活動のモデル・フィールドとする。

フィールドのあるべき姿

“多様性”をキーワードとし、将来の森の“姿”として以下を目指すものとする。

生物の多様性

資源の多様性

森林形態の多様性

活動のあるべき姿

“多様性”をキーワードとし、市民ボランティアを含む多くの協力者とともに、以下を活動のあるべき“姿”として展開する。

活動メニューの多様性

森林施業の多様性

参加者の多様性

フィールドの現状認識と将来像

* 別紙資料 A「鳩ノ巣フィールド森林計画」参照。

活動計画: 上記の方針に従い、単年度活動計画を作成し、実行する。

* 別紙資料 B「平成18年度作業計画」参照。

[平成 18 年度活動報告]

1. 活動方針

「鳩ノ巣フィールドにおける森づくり活動“自立化”に向けた運営体制の基盤づくり」東京都の大自然塾事業の予算措置が平成20年3月までと決められている。これまでの運営団体への経費が消滅することで、自主的に運営資金を調達する必要性が生じる。よって「みどりの募金」「日本財団」その他の助成金に申請し、財源を広げるとともに、企業などからの依頼にも幅広く対応していく

[総括]: 後述。

2. 活動内容

2-1 月1回の「多摩の森・大自然塾」イベントの運営を柱とし、長期ビジョンのもとでの活動計画を実行する。

[実績]

恒例になった毎月第三日曜日の定例イベントは「樹恩ネットワーク」「森林インストラクター東京会」が隔月毎に指導責任者を出すことで、4月～3月において13回を実施(うち11回は東京都環境局主催)。加えて東京都建設局主催の水元大自然塾、東京都町村会主催の子ども対象森林教室、また立正高校、日本サムスン(株)、GEMoney(株)など企業、学校等の依頼による森林ボランティア活動をサポートするなど、22回の活動を企画運営し、延べ1,000名に迫る参加ボランティア(スタッフ含む)に対し、森林再生の意義と必要性を伝えるとともに年間計画のもとでの作業を指導した。特に参加者の「事故」もなく、当初の計画を達成することができた。

* 別紙資料 C「18年度鳩ノ巣フィールド活動実績」を参照。

2-2 月1回の「鳩ノ巣連絡協議会」を開催し、定例のイベント運営の内容及び中長期ビジョンとの整合を図る。

[実績]

毎月第一月曜日を定例日とし、4月～3月の12回を開催。森づくりフォーラム、樹恩ネットワーク、森林インストラクター東京会を主体に常時10名前後の参加者による協議により、毎回の定例イベントの運営体制、実施項目を調整・決定し、円滑なイベント運営に寄与した。また、掲げている中長期ビジョンを踏まえた活動は現状において継続軌道にある。

2-3 関連2団体からの新たなる人材登用を含め、他団体及び個人参加ボランティアとの交流を促進し、イベント運営体制の強化を図る。

[実績]

他団体及び個人活動者からの「班長及び班長補佐」の登用を積極的に行うとともに、2団体からは新たな人材を抜擢し、指導者層の充実を図るとともに

次代、次々代のリーダー養成を意識した三層の年齢層別体制を構成した。現状のイベントスタッフは森づくりフォーラム3名、樹恩ネットワーク10名、森林インストラクター東京会20名、一般4名の計37名。

*別紙資料D「イベントスタッフ一覧表」を参照。

2-4 関連2団体は定例イベントとは別に、自主活動日を設け、目標とする作業計画の達成に努める。

[実績]

樹恩ネットワーク

回数:8回

動員数:延べ47名

主な作業:きのご駒打ち作業、育成調査、下草刈り、ぶり縄等

自主企画の森林ボランティア青年リーダー養成講座における鳩ノ巣での作業体験は延べ3日間、延べ参加者数は74名(内スタッフ28名)。講座修了生に継続して鳩ノ巣に関わってもらうための実践編を3回実施。延べ参加者数は25名。

森林インストラクター東京会

回数:14回

動員数:延べ101名

主な作業:植生調査、下刈り、道づくり、ボヤ刈り、植樹、間伐研修等

*別紙資料E「18年度自主活動記録」を参照。

2-5 地元住民との各種活動を通じた交流を促進するとともに、地元における林業文化の継承や新たな林業事業化の方向を共に考える基盤を作る。

[実績]

月一回のイベントは地元住民にも確実に定着し、フィールドへの往復の際など親密な挨拶を交わすまでになり、フィールドの手入れにおいては一部地元住民との共同作業も通例になってきている。

棚沢地区:長寿会女性部のみなさんとの交流

樹恩ネットワークの有志を中心メンバーとした地元の「長寿会女性部」との交流会「森のクッキング」春編・夏編・秋編・冬編4回を実施。地元で伝わる料理方法の指導を受けた他、80代~90代の古老3名に棚沢の昔の様子や林業の技について「聞き書き」を行った。夏編では、昨年に続き地元で手が回らない登山道の下刈りを手伝った。また、熊野神社の盆踊りへの参加は3年目となり、だんだんと顔を覚えてもらえるようになった。

わさび田づくりも順調

18年3月にスタートした「わさび田づくり」は整地作業の後、5月に苗の植え付けを実施し、現在順調に生育。19年年末には収穫の予定。これは3年半に渡る実績の成果として、地元住民から鳩ノ巣フィールドの近隣にあ

る「休耕地」の提供を受けたもので、指導を地元住民(小林公平さん)に仰ぎ、約 30 名の志願ボランティアが集い、実施している。

3. 鳩ノ巣連絡協議会としての重点実施項目

3-1 活動自立化に向けた運営体制の構築

樹恩ネットワーク、森林インストラクター東京会の2団体を核にした運営スタッフ及びリーダーを増強するとともに、他団体及び個人参加ボランティアにも呼びかけて協議会の運営体制を強化する。また、「運営資金」確保のための方策を模索し、試行する

[実績]

協議会メンバーは森林インストラクター東京会 5 名、樹恩ネットワーク 3 名の 8 名で、今年度における新メンバーの加入はなく、他団体メンバーの参画もなかった。協議会発足時のメンバー 5 名も確実に加齢しており、20 年度以降の自立化に向けた“若返り”は大きな課題となる。

「鳩ノ巣連絡協議会」の PR とフィールド情報共有を目的とする「鳩ノ巣つうしん」は 9、10、11、12、13、14 号を発刊。

* 別紙見本「鳩ノ巣つうしん」参照。

3-2 各フィールドの将来像に基づいた作業計画の立案と実施

	現 在	将来の姿	平成18年度計画
フィールド	2000年に皆伐した跡地	落葉広葉樹林	・ 下刈り ・ 観察と記録
フィールド	1999年に皆伐した跡地。 2000年3月に中間部にスギ・ヒノキを植樹	上部：落葉広葉樹 中間部：スギ・ヒノキの針葉樹 下部：花の咲く木を植樹	・ 下刈り ・ シカ害調査と対策 ・ 観察と記録
フィールド	1994年に皆伐した後地	天然更新の2次林 林班区分して針葉・落葉のモザイク林を形成	・ 道づくり ・ 下刈りと林地整備 ・ 観察と記録
フィールド	2002年に皆伐。 2003年3月に落葉広葉樹を植林	落葉樹林	・ 下刈り ・ 観察と記録
フィールド(1)	1977年植栽地 ヒノキ林	美しく手入れのされたヒノキ林	・ 保育作業 ・ 観察と記録
フィールド(2)	1975年植栽地 スギ・ヒノキ林	美しく手入れのされた針葉樹林	・ 保育作業 ・ 観察と記録

* 詳細は別紙資料 B「平成 18 年度フィールド別作業計画」参照。

[実績]

各フィールドともほぼ計画通りに実施した。フィールド への取り組みも「道

づくり」をメインに本格的な作業がスタートし、計画にはなかった上部カヤ場跡地をメインに 18 年 3 月の第 5 回「植樹祭」では 560 本の広葉樹の植栽も果たした。フィールド(1)、(2)の人工林の整備は順調に推移している。

3 3 「フィールド」の整備の促進

大きくは「除伐を促進して保残木の保護と林床内の埋蔵樹種を萌芽させ、植生種を増加させるエリア」と「遷移のままに天然下種更新を促進させるエリア」とに分け、さらに小さな林班のゾーニングを行い、それに基づいた境界に散策道や作業道を設置する。*別紙資料 F「フィールド 施業計画」を参照。

[実績]

前項でも触れた通り、「作業道」の整備も進み、一部植栽までこぎつけることができた。ただ、鳩ノ巣フィールドではもっとも広い皆伐跡地で、19 年度に向けてはまだ多くの作業が残る。

3-4 「作業部会」による活動

17 年度に続き、定例イベントでは危険を伴う作業、またさらなる森づくりのために不可欠な作業を推進するとともに、将来に向けた「人づくり・後継者づくり」のため、連絡協議会として実施する。

活動日：2006.4 月～2007.3 月 毎月 1 回+追加不特定日

[実績]

回数：11 回

動員数：延べ 105 名(一回当たり 9.5 名)

主な作業：残材整理、棚作り、間伐木の選定、植え付け、間伐～造材、下草刈り、安全基本伐木、企業受け入れ指導、道づくり～橋架け、枝打ち・枝払い等

備考：実践作業体験を通じて、参加者の施業技術のスキルアップ及び安全対策に大きな成果があり、狙いの「将来に向けた人づくり・後継者づくり」活動として定着した。

*別紙資料 G「作業部会/入山作業計画・実績表」参照。

3 5 作業道具の自前提供

「みどりの募金」「日本財団」等の助成金を獲得し、作業道具の充実化を図る

[実績]

樹恩ネットワーク、森林インストラクター東京会それぞれが申請した東京都「緑の募金」助成金は採択され、下記を購入、備品とした。東京会は「日本財団」の助成金も受けた。

樹恩ネットワーク：

トランシーバー 7 ケ、大鎌(両刃)5 ケ、二丁差 6 ケ、ロープ 4 本、砥石 10 ケ、スナッチ・ベルト 5 ケ、他消耗品

森林インストラクター東京会:

チェーンソー1台、チルホール1台、下刈り鎌5ケ、二丁差5ケ
(以上、「緑の募金」助成金)

チェーンソー1台、チルホール1台、刈り払い機1台、ヘルメット10ケ、
他備品(以上、「日本財団」助成金)

定例イベント等の作業道具は森づくりフォーラムの用具・備品で対応しているが、2団体の用具・備品でより有効な対応が可能になった。

なお、用具は奥多摩学生寮内に保管されている。

* 別紙資料 H「作業道具リスト一覧」参照。

3-6 フィールド境界の確定と図面化

17年度に引き続き、森づくりフォーラムに協力し、境界確定に努力する。

[実績]

一部不明瞭な境界も残ったが、ほぼ確定した。この結果、新たな未整備人工林が加わることになった。

* 別紙資料 I「鳩ノ巣フィールド図面」参照。

3-7 植生・資源調査の継続実施とデータ管理化

調査・データ管理の精度をあげるとともに、有用な蓄積を試みる

[実績]

フィールド樹種・育成調査(2007/3/31 現在)

フィールド : 広葉樹/植栽本数 = 50本 51本?

針葉樹/植栽本数 = 27本 8本

フィールド : 広葉樹/植栽本数 = 287本 260本

針葉樹/植栽本数 = 345本 221本

フィールド : 広葉樹/植栽本数 = 502本 485本

フィールド : 広葉樹/植栽本数 = 2060本? 1213本

針葉樹/植栽本数 = 7本 7本

フィールド(1): 針葉樹/調査時点 = 906本 632本

フィールド(2): 針葉樹/調査時点 = 1812本 1434本

総計: 広葉樹/植栽本数 = 2899本 2009本 + ?

針葉樹/植栽本数 = 379本 236本

針葉樹/調査時点 = 2718本 2090本

植栽樹種: 広葉樹 = 31種類

針葉樹 = 3種類

植栽時期: 2003年植樹祭 = 1100本

2004年植樹祭 = 587本

2005年植樹祭 = 487本

2006年植樹祭 = 600本

2006年5月=27本 / 2006年6月=7本

2007年植樹祭=560本

*別紙資料J「フィールド別樹種 2007.3.31現在」を参照。

植生調査:

2006/5/14:フィールド 植生調査

*別紙資料K「フィールド 植生調査結果」参照

水生昆虫調査:

西川下流域調査(2006.10.21~全5回) *調査中

野生動物調査:18年度実績なし

シカ食害調査:特に「調査」活動はしなかったが、常時の見回りでの被害
チェックを行った。角こすり、食害の被害は相変わらず。

ハチ類調査:18年度実績なし

4. イベントを通じた重点実施項目

4-1 参加ボランティアの固定&継続化及び拡大化。具体的には

常なる参加呼びかけ

「鳩ノ巣つうしん」の活用

鳩ノ巣フィールド“自立化”のPR

[実績]

については毎回のイベント時に常に心がけ、は前述の通りである。結果としての拡大化は順調で、企業がらみの参加者増を含め、30人の定員枠は常にオーバーの状態になっている。固定&継続メンバーも漸増している。

4-2 地元住民との共同作業活動の推進

スタッフ・参加ボランティアと地元住民との共同作業により、イベントを盛り上げるとともに、鳩ノ巣フィールド“自立化”の共通認識を醸成していく

[実績]

前述したが、「森のクッキング」など年4回、熊野神社お祭り参加、薬師堂お祭り参加等により、交流を活発化させるとともに、柵沢地区の自治会長他、地元キーマンとの人間関係も年毎に深まっている。

4-3 他団体会員及び個人活動者を含むリーダー・スタッフ体制の構築

具体的には

17年度に続き、イベント終了後の懇談会の開催

“自立化”に向けた「鳩ノ巣クラブ」立ち上げを試行する

[実績]

7月、12月のイベント終了時にスタッフと一般参加者との「交流会」を昨年
に続き実施。スタッフと参加者、参加者同士の懇談ができ、リピーター対

策としては有意義だった。

20 年度以降を見据えた鳩ノ巣フィールドの森づくり活動において、自主的な現場活動の組織体としてのグループ(仮称「鳩ノ巣クラブ」)結成の必要性から計画したものの、実際には試行できず、実現は難しい。

4-4 フィールド案内ノウハウの蓄積と共有化

「東京の森の再生」を目標とする「大自然塾」活動の意義を含め、「中長期ビジョン」を前提とした「フィールド案内ノウハウ」をリーダー・スタッフ間で共有し、新案内人登用も意図しつつ、参加ボランティア及び地元住民に提供し続ける

[実績]

「フィールド案内」は毎月の定例イベントで実施し、案内者も固定的だったメンバーから拡大した。4 年半の活動に伴い、説明内容も変化しつつあり、新たな「案内マニュアル」の作成が必要になってきている。

また、「技術ノウハウの蓄積と共有」についてはスタッフに対し、昨年度の「鳩ノ巣フィールド・活動マニュアル」に続き、「手道具の使い方と手入れ(総集編)」「作業指導の進め方・初心者向け」「道づくり～橋架け作業(実践編)」を作成、配布した。 * 各見本を参照のこと

4 5 シカ食害調査の実施

これまでの植栽樹のシカ食害を随時調査し、記録する

[実績]

棒ネット、ホダ木囲み、竹柵囲みの補修等は行ったが、各対策の効果把握までには至らなかった。時間・労力投入の限界及び調査ノウハウ不足のため。なお、3 月の植樹祭の際、企業からの「獣害食害防止ネット」350m の提供があり、鹿の食害防止のため、3 ヶ所の新植栽地を囲むことにした。今後はその効果把握を行う予定。

4-6 蜂対策を含めた安全管理体制の強化

[実績]

協議会内に「安全担当(1 名)」を新たに加え、定例イベント時での各種注意を行った他、万一の事故発生に備えた「緊急体制連絡フロー」を作成、配布するなど、いっそうの強化を図った。

* 別紙資料 L「緊急体制連絡フロー」

蜂シーズンのイベント時には常に注意を促し、非常時に備えて「蜂ノック」等を携帯するなどの対策を実施し、また作業時の事故防止意識を徹底した。管理団体の自主作業時に「蜂さされ」はあったものの、特に大事には至らなかった。この「蜂対策」は想定事故の中でも大きなウエイトを占めるため、上記安全担当による「八子対策講座」を実施した。

* 見本「八子対策講座/報告書」を参照。

5. フィールド別作業活動計画とスケジュール案

フィールド毎の月別作業計画のもとで、イベント展開を図る。

* 詳細は別紙資料 B「平成 18 年度フィールド別作業計画」を参照。

[実績]

「作業目標の共有化」については恒例になった「初参加者に対する“フィールド案内”」を継続実施し、各フィールドの特徴を説明するとともに“その日の作業の意味”を解説し、ボランティア作業が単なる労働提供に終わることなく、全体目標の一環であることを理解できるよう、努めた。

「作業内容の魅力化」については、いわゆる“作業”ではない「育成・植生調査」を交えたりして、変化を持たせたりした。

6. 自主活動計画

各関連団体は定例イベントの他に、自主的な作業活動を実施する。

[実績]

前述 2-4、3-4 に同じ。

[18 年度活動の総括]

多摩の森・大自然塾「鳩ノ巣フィールド」の 18 年度は 13 回の定例イベントの他、9 回に昇る学校、企業からの依頼による森林ボランティア体験活動があり、延べ 1,000 名に迫る参加者を数えた。さらに、鳩ノ巣連絡協議会 2 団体の自主活動は「作業部会」の活動を含め、30 回を上回る入山を果たし、中長期を見据えた森林整備計画は順調に推移した。

フィールド全体の再生状況は計画通りの進捗で、放置されていたヒノキ人工林の手入れも、当初予定の皆伐地における植樹もほぼ終了し、懸案であったフィールドの整備作業も進み、上部カヤ場跡地での植栽も実施できた。長期ビジョン[委託された現在の鳩ノ巣・棚沢地区の森を「豊かな美しい森 = 多様性のある森」として創出し、奥多摩町の活性化に寄与することで、東京都「大自然塾」活動のモデル・フィールドとする]に向けては、極めて順調な軌道にあると自己評価できる。

活動方針とした「鳩ノ巣フィールドにおける森づくり活動“自立化”に向けた運営体制の基盤づくり」については指導者層の若返りを含むスタッフ体制の充実に応分の成果をみたが、「“自立化”に向けた運営体制づくり」については具体的な成果は得られず、19 年度への持ち越しとなった。その点で、18 年度は個々のフィールド展開は順調に進んだものの、運営体制の変革までは至らなかった年度と総括する。

なお、19 年度については第一次 5 カ年計画総仕上げの年度になり、また「大自然塾」事業の主催者である東京都が 1 年後の平成 20 年 3 月をもって、この事業の予算措置を終了することから、これを念頭に置いた運営方法模索(企業の取り込み、会員制による参加費の徴収等)の年度となる。

[その他]

1. 森づくりフォーラムとの協同強化

運営方法について

[実績]

鳩ノ巣連絡協議会事務局機能の強化。スタッフ増による協議会開催案内や議事録作成・送付など。

他団体及び東京都(環境局)とのコミュニケーション強化の推進

[実績]

特になし。

2. 東京都環境局への要望

「大自然塾」事業は1年後の平成20年3月をもって予算措置が終了とのことではあるが、森づくりには長期の視点が必要であり、5年を経過した森林ボランティア活動の継続及び森林整備に対する市民意識のさらなる醸成のため、この事業継続の働きかけをお願いしたい。

東京都・多摩の森の森林整備の必要性を訴える広報活動の強化を期待したい。

以上 平成19年5月20日

作成: 鳩ノ巣連絡協議会座長 岡田誓 (森林インストラクター東京会)